

第7章 温泉・湯けむりの利用実態

- | | | |
|-----|--------------|---------|
| 第1節 | 温泉と蒸し湯の利用実態 | (中山 昭則) |
| 第2節 | 地獄と湯けむりの利用実態 | (中山 昭則) |
| 第3節 | 湯の花の利用実態 | (中山 昭則) |
| 第4節 | 蒸し湯などの入湯習俗 | (中山 昭則) |

第1節 温泉と蒸し湯の利用実態

1 温泉の実情

別府温泉郷は湯量・泉源（湯口）ともに我が国最大を誇る温泉地といわれて久しい。別府市の温泉の実情について『別府市誌』（2003）からみていく。

別府市には平成13年（2001）現在、源泉数は総数2,850孔あり（『別府市統計書』）、それは全国総数の約1割、大分県全体の実に6割を占める。ただし、現在活動・利用されているのはその8割強にあたる2,418孔で、残りは休止による利用不能あるいは廃棄の状況にあるものである。

温泉の全湧出量も毎分95,434ℓに及ぶ。この内訳は、自然湧出を含む自噴泉は501孔・15,388ℓ、動力揚湯泉は1,917孔・80,046ℓとなっている。

湧出量を地域別にみると、市のほぼ全域にわたっているが、別府地域が最も多く、次いで北石垣・亀川・南石垣・鶴見となっており、この5地域で約82%を占める。

利用源泉数は昭和56年当時と比較すると、150孔減少しており、地域別にみると別府・鉄輪・鶴見地区が多く減少している。特に自噴泉は昭和56年当時には利用源泉数の26%を占め、655孔であったが、2001年度では501孔と利用源泉数の21%に減少している。減少率の高い地域は、別府・鶴見であり、鉄輪・南立石以外の各地域も減少している。

別府温泉郷における温泉の利用の主体は地域住民といえる。市内には現在公衆浴場は158か所を数え、これは静岡県熱海市の80か所を大きく上回り全国一位である。市民が日常的に浴場に通う姿は当たり前の光景となっている。さて、公衆浴場といえば通常ならば銭湯を指し、民間の入浴施設というイメージが強い。しかし、別府市に関して言えば「市有市営温泉」「市有区営温泉」「区有区営および組合営温泉」といった公共の入浴場が圧倒的に多い。

現在「市有市営温泉」は18施設、「市有区営温泉」は65施設、「区有区営および組合営温泉」は19施設ある。

公衆浴場の入浴料金は、物価統制令に基づき、県段階で決定される。大分県は300円（平成5年改正）と定められている。しかし、別府の市営浴場の入浴料金はこの範囲内において市条例で定められ、現在の市民入浴券は1回当たり63円（月額1,890円）と、けたはずれに安い。これは、広く市民が温泉の恩恵を受けることができるように定められた料金であり、市営温泉の運営には毎年多額の市費が投入されている。また、入浴料無料の温泉が市営5か所あることも別府の特色と言える。

また、11か所の市営有料温泉の年間入浴者数はおよそ100万人を数え市民一人当たり年8回程度は通っていることになる。しかし、市内には自宅に温泉を引いている世帯も多く利用者の頻度はもっと高いであろう。

2 様々な利用法

温泉の利用は入浴ばかりではなく、古来より様々な利用がなされてきた。「地獄蒸し」などの調理に用いられるのである。地獄蒸しは、温泉の噴気によって野菜、卵、魚介類など、さまざまな食材を蒸す調理法で別府の名物料理にもなっている。

地獄蒸し料理は、今日ではとりわけ鉄輪温泉で盛んに行われており、これを売り物にしている旅館も多い。ま

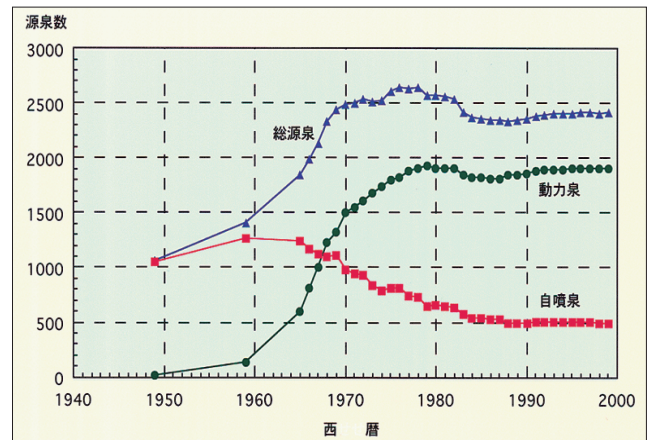


図7.1.1 利用源泉数の推移

た、地獄地帯周辺の土産物屋や食堂では、地獄蒸しにしたサツマイモやトウモロコシ、卵などが売られている。さらに、この地に多い貸間旅館では、自炊用の地獄蒸しのかまどが設けられており、湯治客が利用する姿を見ることができる。調理といっても、かまどの中に食材を入れるだけなので、調理に不慣れな人でも簡単に調理できるのが特徴である。

調理以外では、暖房や洗い物に利用されている。鉄輪の貸間旅館には、部屋を温泉で暖房したところや、温泉熱を利用したオンドル式の洗濯物干場を設けているところもある。食器や野菜などを洗うのに温泉を使うことも少なくない。

温泉は食品などの加工にも利用された。たとえば、味噌である。今でこそ市販されているものを買うことが多くなったが、かつては大抵の家で自家用に作っていた。味噌を作るには原料の大豆や麦を蒸さなければならないが、これに温泉の噴気を利用した。大豆や麦を菰まこもに包んで蒸したのである。同じように茶の加工にも温泉が利用された。製茶の工程には、茶葉を蒸したり乾燥させたりと、熱源が必要なものがあり、これに温泉熱を利用した。鉄輪温泉には温泉熱を使った製茶工場があり、戦後営業していた。

また、温泉はお土産物の原材料としても利用されていた。例えば、「別府鉱水」は大正から昭和初期にかけて販売されていた。昭和8年の『別府市誌』には、塚原（湯布院町）産出の鉱泉を「内服用及外症用とし効能顕著の天然湧出新剤として鉱泉中特種の採集法を以て精製」したもので、大正8年から売り出され、日本全土から海外にまで販路があったと記されている。

また、温泉まんじゅう・おこし・せんべい・かるかんなど温泉を利用して加工した菓子類も土産品として数多く作られている。温泉の噴気で蒸したり、温泉熱を利用して焼き上げたりしたものである。最近では、温泉で蒸したプリンが明礬や海地獄で販売されており、人気を博している。かるかんは『鶴見七湯廻記』にも「地獄蒸し軽羹の法」として製法が紹介されている。当時はまだ土産品としてではないだろうが、当地では古くから作られていたことがわかる。

さらに温泉成分を薬用とした土産品もある。血の池地獄では、鉱泥の成分を軟膏として販売している。酸化マグネシウムが主成分で、皮膚病に効果が高いという。このような軟膏は戦前では多くの地獄で販売されていたようである。

他方では、七島しちとうおもて表の加工にも利用された。七島表は豊後表ともいい、七島しちとうい蘭で織った畳表だが、縦糸にはイチビ（市皮）が用いられた。このイチビを噴気で蒸し、柔らかくして糸にしたのである

別府市には温泉を利用したユニークな施設もある。その代表的なものとして「大分県農林水産研究指導センター農業研究部花きグループ（通称：花きセンター）」がある。この施設は、昭和27年（1952）4月、野菜・花きの温泉熱利用による栽培、花き・花木育種の研究を目的として「大分県温泉熱利用農業研究所」として設立された。その後、昭和41年（1966）には花きの専門試験研究機関となり、名称の変更を幾度か経ながら、平成22年（2010）に現在の名称となった。市民の間では「花きセンター」の名称で親しまれている。

広大な敷地には高品質で低コストの栽培技術の開発施設をはじめ、温泉熱を利用した花きの栽培・育種研究ならびに品種改良と新品種を開発を行っている。また植物園と展示温室もある。オリジナル品種の開発研究も盛んに行っており、平成4年（1992）にはつつじ種の「紫三葉」とヤマジマギク種の「豊の紫」を開発した。さらに、平成5年（1993）にはヤマジノギク種の「TOYO ロマン」、平成13年（2001）には宿根アスター種の「ニュースターピンク」、平成17年（2005）トルコギキョウ種の「ゆふのそよ風」「ゆふの愛」「ぶんごの愛」「ぶんごの紅」を開発している。

別府市が誇る温泉利用施設として「九州大学病院先進医療センター（現在の九州大学病院別府病院）」がある。この施設は、昭和6年（1931）当時の九州帝国大学によって「温泉治療の普及と発展を図る」ための研究所として設置され、翌年から患者治療が始められた。研究施設の設置は大正12年（1923）から計画され、九州各地の温

泉地の候補地の中から別府温泉郷が選ばれたものである。これは泉種が多く湧出量豊富で、地元の積極的な協力が得られたためと記録されている。

当時の石垣・朝日両村にまたがる鶴見ヶ丘地区の3万坪（約10ha）におよぶ敷地は、両村の寄付と九大医学部恵愛団買収地があてられた。研究所は、温泉治療学の学理と応用を研究し、これを基礎とした温泉治療を主要部門とし、兼ねて温泉利用者に対する医学的な最高の指導者、相談相手となることも目的とした。

研究設備は3室からなり、診療部門は、内科・外科・婦人科・皮膚科・基礎研究部の5科と入院室を設置した。浴場は温泉浴を主とした光線浴・電気浴の普通浴場と、炭酸ガス浴・鈹泥浴・ラジウム浴・各種薬浴・電気浴・熱気浴・砂浴・光線浴・ファンゴーてんよく纏浴・腸薬浴・赤外線浴・電光浴等の全身浴・部分浴治療浴場が設けられた。

開所以来、今日まで“温研”の名称で市民・県民に親しまれ、大分県医療の発展に大きな足跡を残した。昭和57年（1982）には「九州大学生体防御医学研究所」と改称された後現在の名称に至っている。

さらに、我が国有数の地熱地帯ならではの施設も設置されている。それは大正13年（1924）に開設された「京都帝国大学地球物理学研究所（現京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設）」で、野口原に開設された。

別府の特色である火山と温泉の科学的な解明のため、はじめての学術研究機関が設置されたのである。約5,000m²の敷地は当時の別府町が提供したものである。温泉町にこのような科学研究機関が設立されたことは、学術文化都市の要素を加味することになった。

地球物理学研究所の研究対象は、温泉に関する研究から広く地球全体、すなわち広義の地球物理学、そして気象学・海洋物理学・地質学・地震学の分野に及んでいる。特に、地熱の作用による別府温泉地帯変化の沿革とその地形図、温泉地帯岩石学、温泉含有鈹物の研究等に成果をあげた。また、温泉地帯の気象観測を行い、大きな成果を上げるとともに社会的にも有益な情報を提供してきている。

開設以来現在まで、温泉・気象・地震の資料を集積し、地下水の流動機構、地下熱水、温泉生成過程の研究に顕著な業績を残している。温泉物理学の研究機関としては、わが国唯一のものである（『別府市誌』昭和8年版・昭和60年版、『大分百科事典』）。

尚、赤レンガで造られた研究所の建物は文化遺産としても高い価値を誇っている。



写真7.1.1 開設当時の九大医療センター



写真7.1.2 開設当時の京都大学地熱研究所

第2節 地獄と湯けむりの利用実態

1 湯けむりの種類

別府温泉郷を代表する景観といえば湯けむりが立ち込めるあの景観であろう。大分大学姫野研究室の調べたところ、噴気が立ち上る湯けむりは400本以上あるとのことである。湯けむりは海からみても扇山を背景に斜面上に立ち上る景観は迫力がある。また、鉄道にて別府を初めて訪れた旅人は、亀川から上人が浜にかけての海の景色を堪能したのち、車窓を山側に転じると斜面上に幾筋にも立ち上る湯けむりに暫し見入ったことであろう。さらに、高速道路からの湯けむり景観は圧巻である。大分高速道を福岡方面から来れば、明礬の湯けむりを左に見た後、一気に広がる幾筋もの湯けむりとその背後に広がる別府湾の絶景には目を見張るものがある。このような湯けむり景観は、NHKが募集した「21世紀に残したい日本の風景」において富士山に次ぐ堂々の2位にランクされた。

湯けむりには、自然のものと掘削された沸騰泉や噴気によるものがある。例えば、明礬地区で見られるのは自然のものであり、あまり高く立ち昇らない。高く立ち上る湯けむりは、沸騰泉や噴気からのものである。鉄輪温泉の湯けむりの多くは掘削された沸騰泉によるものである。

また、鶴見岳山頂近くの北西斜面及び伽藍岳山頂の南側（由布市湯布院町）には自然の噴気活動があり、これらからも湯けむりが僅かながら立ち上っている。

湯けむりの正体は、沸騰泉・噴気から噴出した水蒸気が凝縮して細かい水滴になったものである。水滴は空中で再び蒸発するので、ある高さまで上昇すると、湯けむりは消える。風が強いと、湯けむりはたなびいたり、ちぎれたりしてよく見えなくなるし、霧や霏^{もや}のため視界が悪い日は見えにくい（『別府市誌』平成15年版）。

湯けむりの見え方は、噴出する水蒸気の量と空中での凝縮量及び水滴の蒸発の早さに左右される。蒸発の早さは湿度が高いとき遅いので、湿度が高いときに湯けむりは見えやすい。天候では曇りの日に、時間では朝夕によく見える。季節では、冬が最も見えやすい。これは、気温が低いいため水蒸気の凝縮量が多いからである（『別府市誌』平成15年版）。

湯けむりそのものは高温であるため直接利用することは少ないが、市内にはその噴気を上手く使いながら暮らしている人々も多い。

2 様々な利用

湯けむりの噴気を利用した生活の知恵といえば地獄蒸し料理であろう。古くからは噴気を利用してゆで卵を調理するという事は別府のみならず各地で行われてきた。しかし、噴気を利用して食事も調理するという事は、やはり豊富な湯量と泉源を誇る別府でしかできない技であろう。この調理法は地獄の噴気を利用して海産物や作物などを蒸すだけの極めてシンプルな方法である。しかし、最近になって蒸す温度と時間の絶妙なタイミングをとらえると優れた健康食として調理できることが判明し、テレビで紹介されるなど注目を集めている。また、最近では明礬温泉で創作された地獄蒸しプリンも人気を呼んでいる。

この地獄蒸しによる調理法の歴史は古く、江戸時代に制作された『鶴見七湯廻記』にも描かれている。これは今井地獄について記載した箇所、「同（今井地獄のこと）蒸物」と題し、蒸気が出ている穴に芋を入れて蓋をかぶせようとしている女性、蒸し上がりをキセルをくわえて待つ男性、蒸した



写真7.2.1 地獄蒸し調理場



写真7.2.2 地獄蒸し調理

ばかりの芋を桶に入れ頭に載せて運ぶ親子、地獄の上に鉄瓶を直接置いて湯を沸かしている様子などが、いきいきと描かれている。現在の地獄蒸しかまどのようにきちんとした設備ではなく、自然の地獄をそのまま利用しており、地獄蒸しの古い形を知ることができる。

別府温泉郷は全国でも有数な地熱地帯でもある。その特性を活かして地熱発電もおこなわれている。現在地熱発電を実施しているのは観海寺温泉にある「杉乃井ホテル」で、発電能力3,000kwの発電所を持ち、消費電力のおよそ半分をこれで賄っている。

また、鉄輪温泉の湯治宿では噴気を暖房用のエネルギーとして利用するところも多い。その方法は、温かな噴気を管で送るものと、床暖房にする方法がある。

また、平成21年(2009)7月に、海地獄、血の池地獄、白池地獄、龍巻地獄は「別府の地獄」として国の名勝に指定されている。これら地獄は源泉の維持のために周囲の森林を所有し「かん養林」としている所もある。

その一方では、源泉が衰え消滅してしまった地獄も確認されているだけで14か所ある。

名 称	所 在 地
八幡地獄	南立石八幡町
八幡間歇地獄	南立石八幡町
無間地獄	南立石八幡町
雷園地獄	御幸
鉄輪地獄	御幸
十万地獄	御幸
雷地獄	風呂本
紺屋地獄	明礬
朝日間歇地獄	火売
今井地獄	竹の内
三日月地獄	観海寺
堀田地獄	堀田
照湯地獄	小倉
乙原地獄	乙原

表7.2.1 消滅した地獄

注)『別府市誌』、中山(2003)より作成

第3節 湯の花の利用実態

1 湯の花生産の歴史

明礬とは、硫酸アルミニウムとアルカリ金属やアンモニウムなどの硫酸塩の化合物である。水によく溶けるため、染色や医薬、製紙などに使われる。江戸時代には豊後森藩領であった鶴見村明礬や天領であった野田村明礬で製造され、「豊後明礬」として全国的にも著名であった。しかし、唐明礬が輸入されて値崩れし、経営不振に陥り、唐明礬の輸入差し止めを幕府に再三願い出たが、叶えられずに倒産してしまう。

その後、享保12年（1727）には和明礬の質の向上により、唐明礬の輸入が差し止めとなり、同20年（1735）には明礬会所が設立され、販売の独占が許された。しかし、再び安価な唐明礬が輸入されるようになり、江戸末期には豊後明礬は次第に衰退し、湯の花の製造に転換した。湯の花は硫黄華や石灰華など温泉中に生ずる鉱物質沈澱物であるが、水に溶けるため、通風性も保湿性もあって雨を遮る藁葺きの屋根で覆い、地元でとれる青粘土を地熱で温めて、霜柱状に噴出させたものを採取したものである。

湯の花は主として全国各地の銭湯で湯の花を入れることによって温泉と変わらぬ効果があるとされ、次第に明礬地区の名物となった。それとともに藁葺の湯の花小屋も明礬温泉を代表する風物となっていった。

明治後期になると、湯の花製造に大阪や大分資本が進出したことは、明礬が温泉地としての知名度を上げていく大きな要因となった。

湯の花生産は順調に伸び続け、明治42年（1909）の『朝日村誌』には「湯の花三千円を下らず」との記録が残され、地元には大きな利益をもたらせたことを窺わせている。明治後期には湯之花組合が結成され、組合之証（特許権共有之証）を持つ者だけが湯の花採取ができるようになり、独占化が図られていた。

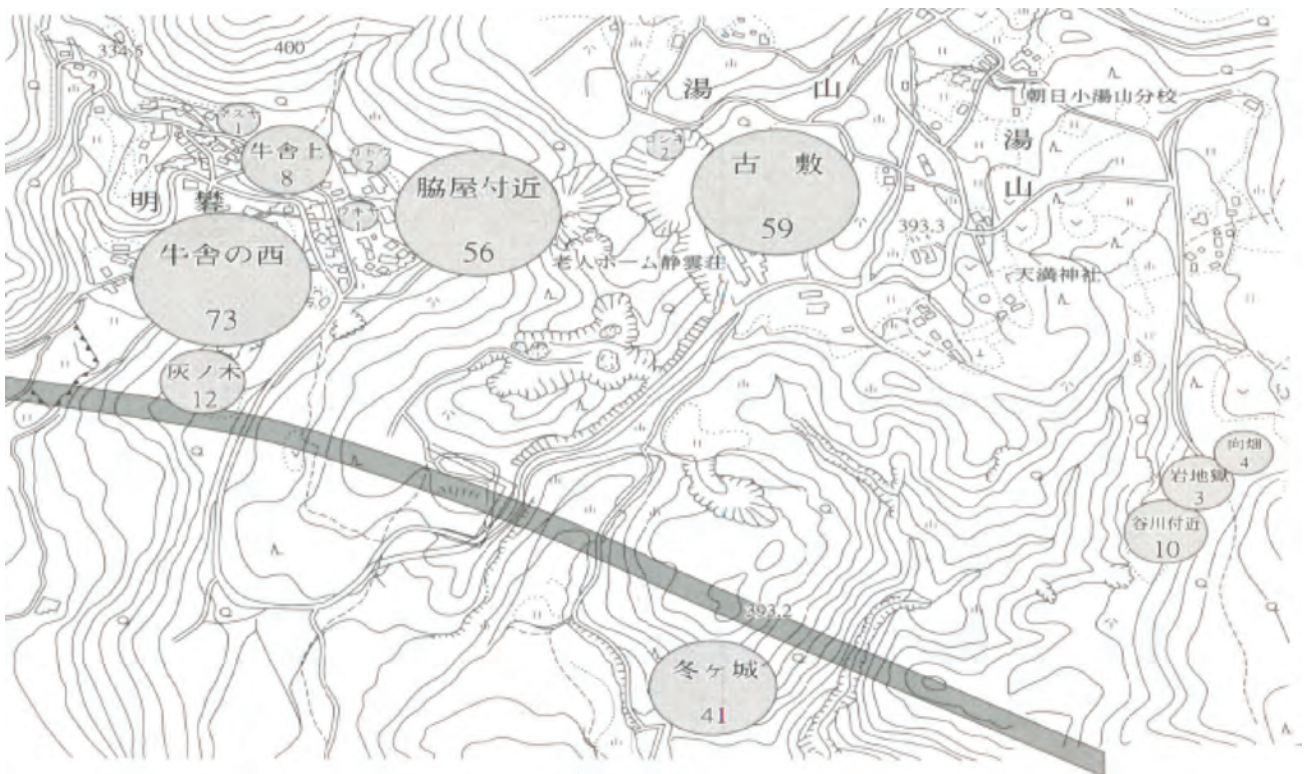


図7.3.1 全盛期の湯の花小屋の分布
出所：恒松栖（2000）87ページより抜粋

湯の花の生産は大正期から昭和初期に全盛期を迎えた。大正15年（1926）には、明礬地区と湯の山地区では38戸が272棟の湯の花小屋で湯の花を製造していた。

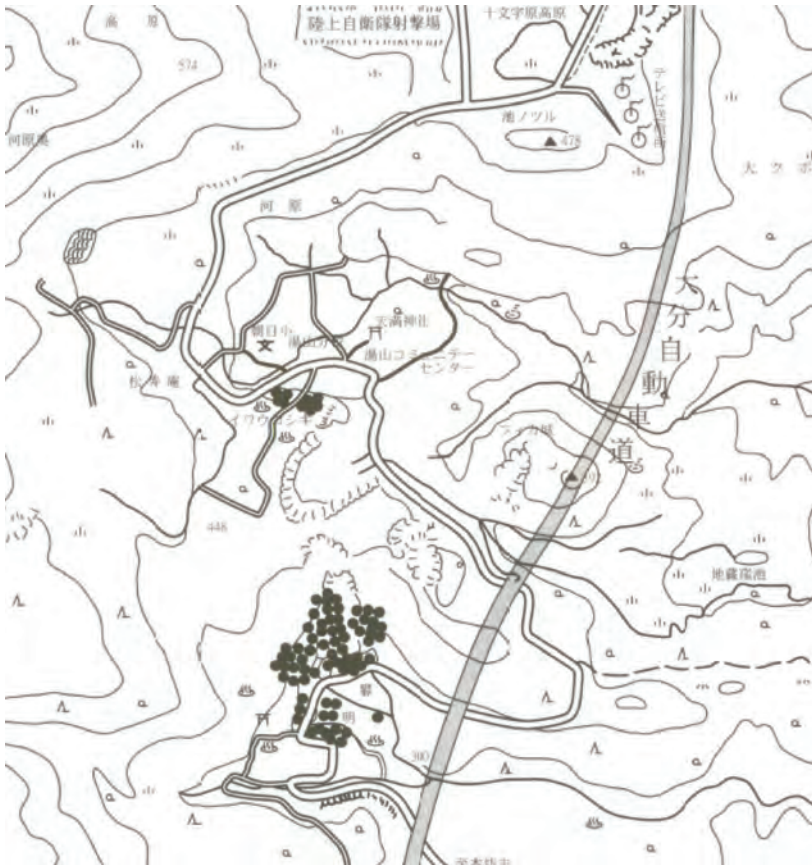


図7.3.2 現在の湯の花小屋図
出所：恒松栖（2000）92ページより抜粋

2 現在の湯の花生産



写真7.3.1 全盛期の頃の湯の花小屋

現在の湯の花生産工程について、ここでは『別府市誌』（2003）の段上による記載からみていきたい。

湯の花小屋は大小あるが、おおよそ60～70m²程度の広さを持つ。天地根元造りともいえる藁葺きの切妻屋根だけの構造で、間口約5m、奥行き約12～14mほど、高さ約4mである。湯の花が凝固する間、風雨から守るのである。

湯の花小屋の床部分は、掘り窪めて小石を敷き詰め、その間に硫気溝を縦横に敷設し、高温の噴気が全体に廻るようにしてある。この溝は石積みの隧溝（埋設溝）で、

かつては木造の樋や土管なども用いていた。この上に藁や草を薄く敷き、普通の土を被せた上に鉄やアルミニウムを含有するギチ（青粘土）を厚さ20cmほどに敷き詰めて堅く打ち締める。硫気溝に噴気を送り込むと、数日後に線状の結晶が青粘土上に発生し始める。噴気の加減や環境などによって発生経過や発生量は違うが、30日～80日ごとに湯の花を小さなこて鋏で採取する。1年間に3回から6回程度青粘土を張り替える。

湯の花の生成メカニズムは次のようになっている。硫化ガスに含まれる硫化水素と二酸化硫黄は、酸素の供給具合によって過酸化硫黄となる。硫気溝に近い青粘土は少しずつ冷却されて水滴が生じる。これに過酸化硫黄が溶け出して硫酸になる。一方、地表面に近い青粘土は水分が蒸発して乾燥するので、青粘土の細かい隙間を毛細管現象によって硫酸溶液が上昇する。その途中、青粘土に含まれる鉄とアルミニウムを溶出する。このように生成

された硫酸鉄と硫酸アルミニウム溶液は、地表面近くの青粘土に浸出し、緩慢な蒸発によって、赤色・黄色・白色の針状の結晶となる。

この結晶が湯の花で、ハロトリカイトとアルノーゲンの混合物である。湯の花の採取が進むに連れて、青粘土は二酸化珪素の組成比が大きくなって白くなる。そして、次第に湯の花の生成速度が遅くなり、クリストバライトを主とするオパール質に変質して、湯の花は生成できなくなるのである。



写真7.3.2 現在の湯の花小屋

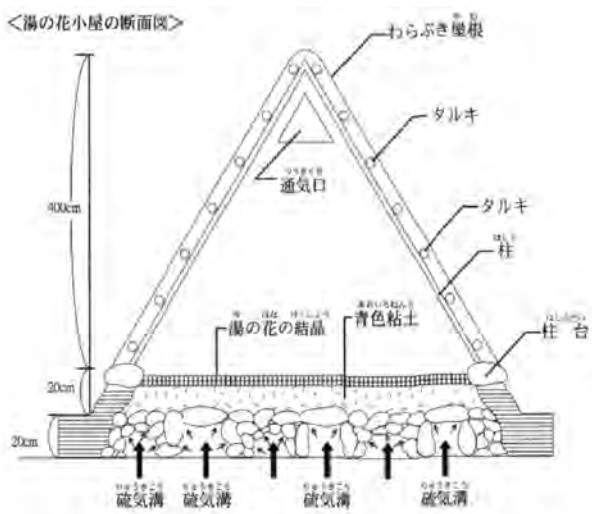


写真7.3.3 現在の湯の花小屋内部

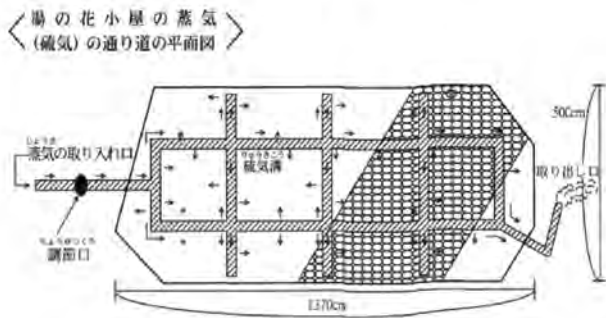


図7.3.3 湯の花小屋断面図
出所：恒松栖（2000）93ページより抜粋



写真7.3.4 明礬温泉全体

第4節 蒸し湯などの入浴習俗

1 旅人の見た入浴習俗

別府温泉郷における温泉入浴にまつわる習俗（慣習）に関しては旅人による記述が残されている。

江戸時代中盤に差し掛かろうという正徳2年（1712）に、寺島良安^{てらじまりょうあん}によって編纂された『和漢三才図絵』^{わかんさんさいずえ}には、全国の地獄や温泉として、温前・鶴見・阿蘇・富士・浅間・羽黒・立山・白山・箱根・焼山の10か所の山が挙げられ、これら噴煙を上げている高山の付近に地獄が存在すると記しされている。別府では鶴見山が挙げられており、地獄としては全国に知られていたことを窺わせる。また、血の池地獄が赤江地獄として紹介されている。

そもそも、現在のように湯に身体をどっぷりと浸らせる入浴法は鎌倉時代に入って広まったとされる。それ以前の入浴はいわゆる乾浴と呼ばれるものであった。

別府温泉郷における入浴習俗（慣習）に関する記述は、元禄7年（1694）4月に旅の途中この地を訪れた貝原益軒が残している。彼はまず亀川温泉の里屋で「塩湯」に出会ったと記している。恐らく海岸に泉源があり、潮が満ちると海水が入ってきていたのであろう。

次いで、鉄輪温泉を訪ねそこで「熱湯の上に構えた風呂がある。病人はこれに入って『乾浴（蒸し湯）』をする。高さ二間半（5m）ばかりの滝湯もあり、ここでも病人が打たれる。」と記している。つまり、現在の蒸し湯が紹介されているとともに、打たせ湯の記述も見られる。

益軒の旅は続き別府村に入る。「石垣村の南にある別府村は民家500軒ばかりだが、民家の中には、温泉を持っている家が十軒もある。どの湯も清らかだが、庄屋の家の湯は特に清らかである。この地方の湯は他地方に勝てみなおおむね清和である。各家にあるので、家に泊まる客人以外は入浴する者がいないので、客は思うままに入浴している。他地方の温泉のように喧騒がない。湯には『懸樋（かけい）』の施設があって、温熱は心任せに調整できる。」と記している。

当時すでに「内湯」を所有する家もあったことがわかるが、500軒中僅か10軒に過ぎず、しかも庄屋の家について記していることから在郷の支配層に限られていたのであろう。その上、泉質に関わる記述までみられる。さらに、客人以外入浴はしていない様子もわかる。

また、「薬師堂の近くには熱湯があり、その上にきれいな乾浴する風呂がある。」との記述も見られ、熱湯の蒸気を利用した乾浴が一般的に行われていたことを示唆している。さらに「村の町中には川（流川）があり、川沿いに温泉が湧いている。その下流の湯は朝夕、里の男女が混浴する。海中にも湯が湧きこれは塩湯である。干潮になると入浴する者が多くなる。これは潮湯なので病気によく効く。」との記述もあり、庶民は日頃流川のほとりから湧き出ている温泉を利用していただろが窺える。

天明3年（1783）には、岡山藩の学者古川古松軒^{ふるかわこしょうけん}も、豊前豊後地方を旅して後年『西遊雑記』を書き記している。

鉄輪村の記述は「地獄が多く、紺屋地獄には藍色の湯が湧いている。地獄の名称には酒屋だの酒屋など様々な呼び名が付けられている。中でも池（ち）の地獄と呼ぶものは、広々とした池で、鼎（かなえ）で湯を沸かすように見え、湯は2・3尺も湧き上がり、見学の者が誤ってその湯をあびると火傷をすることである。土地の人はこの池で野菜を茹でて食べる。温泉はみな硫黄の臭いが鼻をつく。」と記されており、地獄が庶民によって利用されていた様子を伝えている。

また、益軒同様別府村にも立ち寄り「この町はながながしい在町（ざいまち）であり、家ごとに湯がある。ともに温度が適当で痔や腫れ物によく効（き）くとの評判であり、入湯客も来る。別府に到着して以来、宿々の水はみな硫黄臭くて飯も汁も硫黄の臭いが移って甚だ窮屈である。」と書き残している。益軒の記述同様別府村で

は家ごとに温泉を引いていたと記している。さらに、硫黄の匂いにはかなり閉口したようでもあった。

立石村の「村明細書（記録時期不詳）」には堀田温泉と観海寺温泉はそれぞれ皮膚病と淋病等に効能があると記されているが、鳥の湯は取り立てて効能は無いため村人が入浴しているとの記録が残る。こうしたことから地元住民と温泉特に効能があるとされる温泉との係わりを垣間見ることができよう。

他方、江戸時代には交通の要所として栄えていた浜脇温泉には既に「砂湯」があったという記録も残され、「すこし砂地を掘れば湯がある。人々は砂を掘り除けて穴を掘り、その中に身をはめて、周囲の砂を搔（か）き寄せて湯気で身体を温める」との記録も残っている。

また、亀川温泉については協蘭室が文化4年（1807）に著した『^{かんかいぎょだん}菌海漁談』に詳しい。

これによると、亀川一帯では人家はみな湯を使っている様子が描かれている。さらに、^{ふるいち}古市地区では、干潮時には波打際から湯気が立ち上り「人々は砂を掘り、石菖（せきしょう）を敷いて石枕で砂湯をする。冷えれば底を掘って湯加減をし、そこが飽きれば他に移り新湯を開く」との記述がみられる。

江戸時代の末までは別府温泉は、地獄が一部に知れ渡っていたものの、温泉地としてはいわゆる「塩湯」と呼ばれた「砂湯」が記載されていたに過ぎなかった。ところが、幕末を迎えた嘉永4年（1851）の「^{こうのうかがみ}諸国温泉効能鑑」では、豊後浜脇湯が西前頭三枚目、豊後別府湯が同六枚目に位置するまでになった。

2 湯治の習俗（慣行）

湯治慣行は一般的に「七日一廻り」といわれてきた。これは身体内の様々な物質は7日間で体内を巡り出るといわれ、そのサイクルに合わせた入浴が適しているとされたことによる。多くの湯治客はこれを二廻り・三廻りしていた。つまり、湯治客の滞在は短くて1週間長ければ1か月以上滞留する人もいたという。

また、日本人の入浴方法も、民俗学者の柳田国男によれば風呂の語源は「室（ムロ）」で、つまり蒸し風呂が日本の風呂の原型だという。絵巻物に描かれた風呂の様子も蒸し風呂が圧倒的に多く、蒸気浴が主流であったといえよう。この蒸し風呂は西日本特に瀬戸内地方にも多くみられ、その遺構が多く残されている。県内でも杵築市山香町に見られる。

昭和30年代までは別府温泉郷にも湯治客が多く訪れていたが、とりわけ鉄輪温泉はその中心地として賑わっていた。昭和初期の鉄輪温泉は湯治宿を営む家は大半が農業との兼業であった。当時でやってくる湯治客の大多数も農家であったので、家業（農業）と宿泊業が重なることもなかったであろう。

鉄輪には「蒸し湯」「洪の湯」「熱の湯」などの共同浴場がありこれらに通いながら湯治をしていた。当時の湯治宿は特に「熱の湯」周辺に集まっていたようである。また、「蒸し湯」はリュウマチや神経痛に効能があるとされたため湯治客が絶えなかったという。「蒸し湯」の薬師前には療養によって癒された湯治客が置いていった松葉杖が山と積まれていたといわれている。「蒸し湯」の構造は八角形で一度に16人が収容できた。これは十六羅漢を模したものともいう。

蒸し湯の室内には石菖が敷き詰められており、その上に石枕をして横になったという。2005年に建て替えられるまでは蒸し風呂は男女混浴であった。かつては男性は禪で女性は腰巻を身に付けて入ったそうであるが、今では共に下着かTシャツを利用する。こうした入浴法は、



写真7.4.1 旧蒸し湯



写真7.4.2 現在の蒸し湯

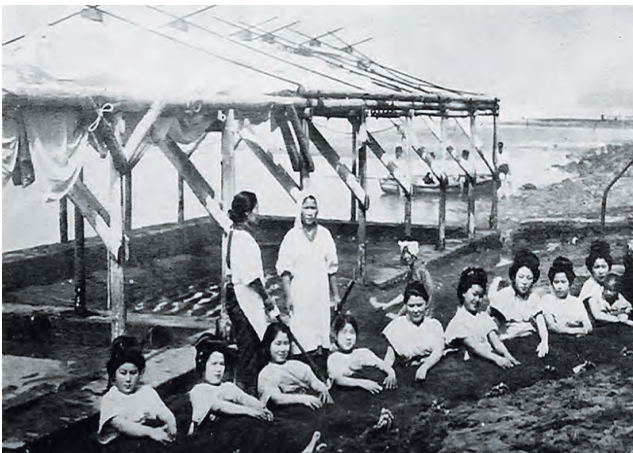


写真7.4.3 戦前の砂湯



写真7.4.4 現在の砂湯

江戸時代に描かれた『鶴見七湯廻記』にも石で造った蒸し湯が描かれていることから、かつては鉄輪以外にも蒸し湯が存在していたことがわかる。

地元からの聞き取りによると「蒸し湯」は代々40～50年ごとに建て替えられてきたという。現在の蒸し湯は2006年に新築されたもので、浴室も男女別となり収容人員も倍増した。また、休憩室も設けられるとともに地域の観光情報発信拠点としての役割も担う。建物前には「足蒸し湯」も設置され、気軽に蒸し湯の雰囲気を楽しむこともできるようになっている。その趣はより観光施設としての機能を高めたものといえる。

蒸し湯とともに別府温泉郷を代表する入浴法として「砂湯」が挙げられる。これは海岸に湧き出る源泉を利用したもので、体全体に砂をかけて暖まるものである。鹿児島県指宿温泉でも盛んに行われている。効用としては、温泉熱と砂の圧力による効果が期待できる。こうした入浴法は珍しかったため、絵はがき等に多く残されている。この砂湯は前述のとおり江戸時代には行われていた。現在では上人ヶ浜に市営の砂湯、また竹瓦温泉など屋内に砂湯の施設を持つところもある。

かつて盛んに行われていたいわゆる「天然の砂湯」は当然であるが干潮の時間帯しか利用できなかった。このため、干潮時刻が深夜や早朝の日などの時は、係員が旅館を回ったり、得意の客を起こしに行くこともあったという。砂湯には客に砂をかける砂掛けさんがいて、飲み物を飲ませたり客の汗を拭いたりといったサービスもしたという。砂掛けの料金は、大正末期で浴衣の賃料を含めて1人5銭であったという。

その他、入浴に関わる習俗として、「滝湯（打たせ湯）」「泥湯」があった。滝湯は滝のように流れ落ちる温泉に肩・腰などの局所を当てる入浴方法である。温熱効果とともに圧力による刺激も効果があるとされている。現在では幾つかの入浴施設に備えられているが、柴石温泉はその代表例といえよう。また、鉄輪温泉の渋の湯に滝湯を示す絵も残されている。また「泥湯」は温泉の噴出とともに鉱泥が溜まった温泉に入浴することである。足腰等の痛みに効くとされたが、今日では美容効果が高いとされ、別府市では民間業者とともに「泥パック」などの開発も行っている。

〈参考文献〉 第7章

- | | |
|------|-----------------------------------|
| 印南敏秀 | 2005『温泉フォークロア』 愛知大学総合郷土研究所 |
| 浦達雄 | 2006『別府温泉郷の観光地形成に関する研究』 (株) クリエイツ |
| 是永勉 | 1966『別府今昔物語』 大分合同新聞社 |
| 恒松栖 | 2000『西暦2000年 別府風土記』 (株) クリエイツ |
| 別府市 | 1985『別府市誌』 昭和60年版 |
| | 2003『別府市誌』 平成15年版 |